

駿河國富士川

尋常揭厲必過腰、咤馬呼奴魂欲銷、來往就中何處苦、無舟無筏復無橋。

〔東遊行囊抄十二〕富士川 船渡也。此渡蒲原ト吉原トノ馬次ノ塚也。蒲原ヨリ東ニ行スルモノハ、西ノ岸ニテ荷ヲ下シ、吉原ヨリ西行スルモノハ、東ノ岸ニテ荷ヲ下ス。治承四年十月二十日、平惟盛、忠度、知度、東征ノ時、此渡ノ西ノ岸ニ陣スト云ニ、但岩淵ノ宿カクテノ事方ルベシ。

此國ヲ駿河國ト號スル事、此川ニ依テ也。風土記富士川ノ流、其水キハナテハヤシ、仍駿河ト名ヅタト也。駿ドハハヤキ馬ノ事ヲ云、浪ノ漲リ落ル事、駿足ノ如逸カル故ニ云ド也。

〔東海道名所圖會四〕富士川 駿河富士郡にあり、郡名によつて名とす。日本紀不盡河と書す。水源は信州八ヶ嶽より流れ、甲州に到ツて諸流會じて大河となる。未だ海に注ぐ道中第一の急流也。河の幅水の増減によつて際限極らず、常流には船わたし、満水には船とまる也。

〔日本書紀皇極二十四〕三年七月、東國不盡河邊人大生部多勸祭虫於村里之人曰、此者常世神也。

〔萬葉集三〕詠不盡山歌一首并短歌

奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與己知其智乃國之三中從出立有不盡能高嶺者○中略
河跡人乃渡毛其山之水乃當鳥○下

〔十六夜日記〕廿七日、明はなれて後ふじ河わたる、朝川いとさむしかぞふれば十五瀬をぞわたりぬる。

さえわびゆ雪よりおろす富士河の川風こほる冬の衣手

〔丙辰紀行〕富士川

我國に名を得たる大河はあまたあれど、殊に富士川は海道第一の急流なり、舟に乗で渡るに、渡し守ちからを出して竿をさし、櫓をおし出すとき、岸より見るものは、あはやと危く思ひ、船中の人は目まび魂の消る心地ぞ玄けり。